

## 東京大学・鎌田実教授の講演 - 9月度ATIS例会 -

9月度の例会で、鎌田教授に講演していただきました。演題は『超高齢化社会に向けた学際科学「ジェロントロジー」』でした。近い将来、高齢に突入する我ら ATIS メンバーにとって、「自分の問題」としても考えなければならないテーマでした。

鎌田教授は、東京大学大学院新領域創成科学研究科に所属され、生活支援工学を専門とされています。

「日本における人口構成の推移」から話が始まりました。2050年、65歳以上の割合が約40%、75歳以上ではその割合が半分以上になるとい、逃れられない現実を突きつけられます。また、高齢化は過疎化の進む地方で深刻なイメージがあるが、地方は既に高齢社会になっており、20年後も今と高齢者の数は変わらない、むしろ都市部の方がこれから高齢化が急速に進むという現実も紹介されました。

そうした現実世界を、どう生きるのか、丁寧にご説明をいただきました。

まずは、「Aging in Place」。「住み慣れた地域で安心して自分らしく老いる」ことを実現するため、元気なうちにそれを維持するような取り組み、弱ってきても安心して暮らせるような仕組みが重要。また「認知能力の年齢による変化」として、50歳を超えると「短期記憶能力」は衰え始めるが、「言語(語彙)能力」「日常問題解決能力」は70歳まで成長を続けるというデータに勇気をもらいます。

そして「東京大学・高齢社会総合研究機構」の設立と活動内容と続きます。6,000人の高齢者を調査し、早々に老化する人、徐々に老化する人、まったく衰えない人が一定の割合で存在すること、男女間で差があることなど興味深い調査結果を教えてくださいました。75歳を過ぎても全く衰えない男性 Resilient が10.9%いるというデータは我々にとても勇気を与えるものでした。

続いて、「在宅医療の必要性」「東日本震災被災地での活動」「柏市・東大・URが取り組む長寿社会のまちづくり」のご紹介をいただきました。とても具体的な活動で、震災被災地の仮設住宅での「路地デッキ+コモンスペース」は、まさに英知の塊でした。天皇・皇后両陛下も感心されたようです。

「柏市・東大・URの取組」も、高齢化率40%を超える豊四季台団地という将来の日本を象徴する地域での活動で、在宅治療を具現化する「地域包括ケアシステム」、「生きがい」と「働く」を両立させる「高齢者の生きがい就労」をどう展開するのかを説明するものでした。これもなるほどとうなずくばかりでした。

最後に、鎌田研究室の研究活動が紹介され、高齢者用コンセプトカー、高齢者の自立を支援する自動運転システム、柏キャンパスのご説明をいただきました。

全体を通じて、これから迎える超高齢化社会にソリューションを与える「ジェロントロジー」。多方面からご説明いただき、理解できたように思いました。勇気をいただき、ありがとうございました。



鎌田教授の講演風景